



# 不快な来 訪者

川崎ゆきお

ぎりぎりだが、何とかイラストで食べている高橋は、イラストを食べているわけではない。  
仕事場である安アパートの板戸をノックし、いきなり開け、土間から畳へと足を踏み入れようとしている大男がいた。

高橋は押し込み強盗かと思ったが、こんな所に来る泥棒も強盗もないだろう。

「弟子にして下さい。イラストで食べたいのです」

「何事？」

「イラストで食べに来ました。弟子にして下さい」

男は二の足も畳みを踏み、座敷に完全に入ってきた。

「君はねえ」

「先生の弟子にして下さい」

「だから、僕もぎりぎりなんだ。弟子なんてとんでもない」

「じゃ、アシスタントにして下さい」

「同じだ」

「じゃ、絵をば、見てください」

「絵おぼって、何ですか」

「イラストです。見て下さい」

男は大きなスケッチブックを開いて見せる。結構大きい。最初盾かと高橋は思った。

スケッチブックを開くと、スーと風がきた。

高橋は、絵を見た。

「どげんです？」

「下絵はいいから、清書したものを見せてもらえますか」

「何がです」

「いや、だから、スケッチはいいから、完成画を見せて下さい」

「しちよりますよ」

高橋は、スケッチブックを何枚もめくる。

「これは何で書いたの」

「先生に見せるためです」

「だから、そうじゃなくて、道具だよ」

「ペンです。先生はペン画の人だから、ペンで書きました。だから、これ、完成したイラストなんですよ」

「これが、フィニッシュ」

「はい。先生の絵も、こんな感じでしょ」

高橋は、むかっとした。追い出そうと思ったが、体が大きそうなので、他の方法を考えることにした。

「先生なら、理解してくれると思いました」

「何を」

「こういう画風をです」

「どういう」

「ですから、少し崩したような絵です」

「崩した？」

「はい、親しみが持てます。先生の絵は」

「崩したわけじゃない」

「あ、そうなんですか。無理に下手に書かれているのかと。わしなんて、目一杯頑張っても、こんな絵ですたい」

「駄目じゃないか」

「はい」

「でも、僕のイラストは、それほど有名ではないし、掲載雑誌も限られている。小さなイラストばかりで、カット屋さんだよ。イラストレーターというほどのものじゃない」

「先生のような仕事ぶりが好きなんです。ひっそりしていますが、長く続くような気がして。派手に売れると、すぐに廃るでしょ。だから、あまり儲かっていない人の弟子がいいのです。ライバルもいないので、弟子になりやすいです」

「話は分かるけど、年寄り臭いねえ。イラストレーターになるんなら、もう少し格好をつけたほうがいいんじゃないか」

「ああ、わたしにはその才覚やセンスがなかと」

「まあ、いいけど、どちらにしても人を雇うほど仕事は多くないし、また、雇える金もない。そういうことです」

「はあ、そうですか」

男はドアへ向かった。

少し淡泊すぎる。もう少し粘ってもいいはずだ。

「お邪魔しました」

ドアを開けっ放しにして、男は出て行った。

高橋はレベルの低い戦いをやったような気がして、不快だった。

しかし、あの絵でイラストレーターを目指す、あの男の根性が信じられない。本人がそれを気付かなければ、きっと珍しがられて、売れるかもしれない。

高橋の不快感は、さらに増した。

了